英語科編18

第118号
平成22年2月15日

番外　イギリス落下傘部隊の発案者

T・オードリーズ　英在職昭和6～7

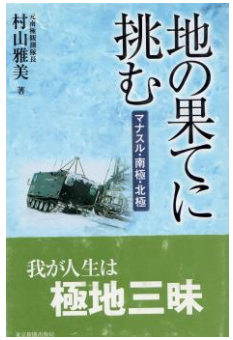
パーマーが、日本の英語教育の指導にあたっていた時期にも、附属中学ではＡＬＴがいました。トーネー、ラムソン、オードリーズ、ウォルツらです。それらの人々の中で、一番著名な人物はT・オードリーズです。

彼はもともとイギリスの軍人で、来日前には、明治時代末から大正時代に盛んに世界の各国が行なった南極探検で、南極横断をねらうイギリスのシャクルトン隊の副隊長格で参加していました。その時に、乗っていた船が難破し、南極の孤島エレファント島に数ヶ月の救援を待ちましたが、彼の指揮で一人の犠牲者も出さず、全員救助され、「南極のオードリーズ」と絶賛されました。さらに、その後、第1次世界大戦に参戦し、表題に記したように、落下傘部隊の創設者の1人として活躍し、低空降下世界記録を持っているというような勇者でした。

そのような彼が、なぜ日本にやってきたかといえば、大正10年に世界で初めて日本人が発想・発明し、そして建造した制式空母「鳳翔」での飛行訓練の指導にあったようです。その後、その任務終了とともに、そのまま日本に滞在し、学習院や附属中で英語を教えました。彼の授業のようすなどについては、彼の影響なども大いに受けて、戦後、南極観測隊隊長ともなる村山雅美（４４回）が語っています。

「昭和五年、東京高等師範附属中学校に進んだ私は、オードリズ先生に英語を教わった。紺の背広をキチンと着込んだ先生は、英国人らしい端正な姿で、教壇に立たれたのだ。先生は中学1年の私たちに英会話を教えられたことを今でもよく記憶している。時には、気の利いたセーターを着て、活発に動き回る先生だった・・私たちの尊敬の的は、世界記録保持者としてのリーズ先生であった。当時、世界最低空パラシュート降下の記録を持っておられた先生は、ロンドンブリッジの下を飛行機でくぐったことなど、子どもの気持ちを湧き立たせる話と、巧みに黒板にかかれる絵で、授業が非常に面白かったことを記憶している。」

その後、オードリーズは弘前高校や山形高校で教えた後、ニュージランドにわたり、そこで亡くなりました。昭和５５年、南極観測に参加していた村山は、オードリーズの未亡人がニュージランドで生活をしていることを聞き、「五十年前の附属の生徒です。オードリーズ先生の南極から飛んできました。」といって、未亡人と会い、オードリーズの思い出話にひたったようです。村山雅美著『昭和基地』講談社ブルーバックス昭和４１　同著『地の果てに挑む』東京新聞平成17



36　小倉中学での実践

加藤市太郎　昭和13東高師卒在職14～20　山形県高校教員

「昭和十三年、私の1年四組の担任は、・・新任の加藤市太郎先生であった。当時の小倉中学校には珍しく、唯1人の東京高等師範学校の出身者であった。・・加藤先生は、地縁血縁なく東京高師出身の先輩もいない遠隔の小倉中学校へ、なぜ赴任されたのであろうか。以下は一つの推測である。・・おそらく折から英語教育改革の必要性を認めていた小倉中学校の要請に応じて、（パーマーの始めたオーラル・メソッドを広めるために）加藤先生が選ばれて赴任されたものであろう。・・しかし、わずか1年で附属中に転勤されてしまった。・・そして（戦後）、山形県で高校の教員をしていることを旧友から聞いた。」

加藤について詳細はわかりませんが、たまたま、小倉中学の生徒であった、加藤と何の縁もない、井手勝美（キリシタン史などの研究家）の随想集に載っている話です。

井手勝美著『回想余滴』渓水社　平成16

37　附属中学「科学組」成立事情

福田陸太郎　石川県出身昭和15東京文理大卒　在職15～21東京教育大教授

太平洋戦争の末期、日本の劣戦は科学戦の弱体によるという声が高まり、昭和１９年、永井柳太郎代議士らの提案により、国会で「戦時顕才教育設置に関する建議」が議決されました。そして、文部省の指導のもと、東京・広島・東京女高師・金沢高師の四つの附属中学に、後に「科学組」といわれる特別編成クラスがつくられました。このクラス編成に、附属中学で英語関係の教官として関わったのは、福田陸太郎でした。「科学組」の動向については、そのクラスの生徒であった平川祐弘の『特別科学組』（大修館　１９９５）に詳しいので省略しますが、選ばれた生徒に対しては、特に数・物方面の能力優秀で、これらに興味のある者、さらに、英語も大切で、余裕があればドイツ語・ロシヤ語も、これからはどうしても外国語が大切である、したがって、数学・理科・外国語の授業を多く、ということで、英語教官としてもっとも若かった福田がこのクラスと関わったようです。この科学組は、日本の敗戦により、戦後解散し、普通のクラスに戻りますが、そこにいた生徒の優秀性は、その後の活躍を見ればよく理解できます。福田の科学組とのかかわりは、『桐陰』に「科学組」成立事情と疎開日記抄」として詳しく載せられています。

ところで、福田が教官になったとき、しばらくして、附属中学が、現在の筑波大学東京キャンパスから、現在地に移りました。福田はこの時のことも記しています。それは、生徒とともに椅子などをかついで引越し作業をしているとき、途中の道で「突如スマートな形の飛行機が数機、早稲田方向から附属中の屋根すれすれに低空で私たちの頭上へ飛んできた。・・それは空母から発進して日本本土の初空襲に飛来した敵機であった。・・その後、附中の校舎は夜間爆撃により完全に焼け落ちた。」

戦後、福原麟太郎につぐ名エッセイストになる福田の教官生活は、戦争に翻弄されたことからはじまりました。『福田陸太郎著作集全七巻』沖積舎　1